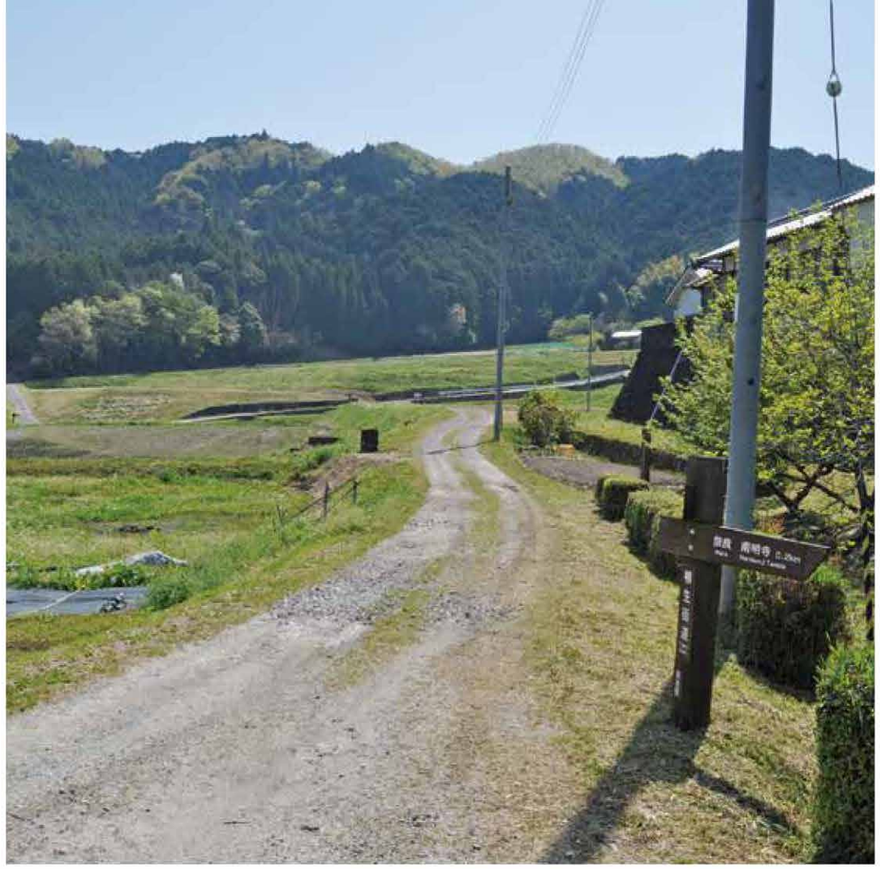
やまとびと特集

大和まほろば見て歩る記

第二回 柳生街道・剣豪の里を歩く



おふじの井戸

南明寺

南明寺とおふじの井戸

JR奈良駅西口から柳生方面行きのバスに揺られること四十五分。今回、スタート地点に定めた阪原バス停を降車した。

まずは南明寺を訪れる。南明寺は真言宗御室派の寺院で、境内の案内看板によると重文の本堂は鎌倉時代の一重寄棟造り。堂内には釈迦如来・薬師如来・阿弥陀如来の坐像（いずれも重文）がいらっしゃるとのこと。三体とも平安時代初期から後期の作と造像の手法がそれぞれ異なるのだとか（現在、文化財保護設備設置工事延長のため拝観は停止中とのこと）。

南明寺から少し裏手の道をたどると「おふじの井戸」という現役の井戸がある。この井戸は、柳生但馬守宗矩がここを通りかかった時、洗濯していたおふじという娘に「桶の中の波はいくつある」と問うた際、すかさず「二十一」と答え、逆に「お殿様がここまで来た馬の歩数は？」と訊ね返した。という民話にちなんだもの。なお、おふじは但馬守に器量と才気を見初められて後に但馬守の正妻に迎えられたそうな。ちなみにこの里では「仕事せえでも器量さえよけりゃ、おふじ但馬の嫁になる」という里歌が残されているらしいのだが…。いや、ちょっとひどくない、それ。

かえりばさ峠と疱瘡地蔵

柳生街道は東海自然歩道とルートを共にしているためか道標が辻々に整備されていて迷うことがない。田園風景の中を道標どおりに進んでいくと峠道に入る。この峠は阪原峠。通称「かえりばさ峠」といって、昔々の花嫁が西の阪原・大柳生から東の柳生へ嫁入りする時、ここで故郷を名残惜しんで振り返ったことに由来するのだとか。先述のおふじさんもここで生まれ故郷を振り返ったのだろうか。

峠道はいきなりの急登。それでもよく整備されていて歩きづらさはない。道は途中から石畳になって柳生街道らしさを足元からも感じることができる。

さて峠を歩き始めて三十分弱で覆屋根に囲われた巨石が見えてくる。疱瘡地蔵だ。

疱瘡地蔵は、その名の通り疱瘡除けを祈願するお地蔵様で、右下に刻まれた碑文が有名なのだそうだ。が、その碑文が見つけられない。碑文は室町時代の中頃に発生した「正長の土一揆」の際、農民が勝ち取った「徳政令」について記されたもので、これを「正長元年柳生徳政碑」というらしい。

疱瘡地蔵の側面には六地蔵と思われる仏様が浮き彫りされていた。また少し離れた場所にも岩に浮き彫りされた六地蔵があった。

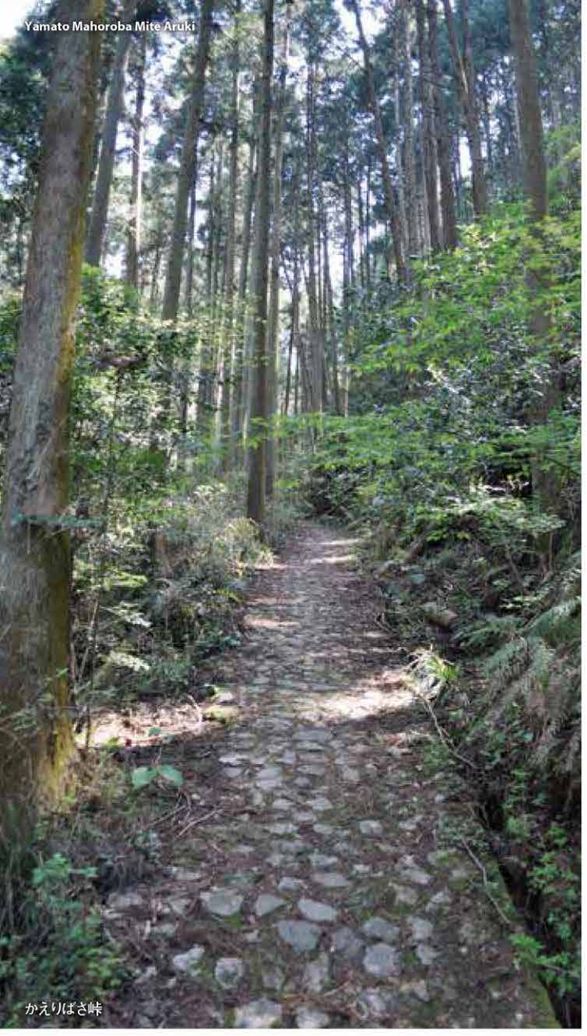
天石立神社と一刀石

柳生街道から少し離れることになるが、天石立神社へ向かう。折しも某大人気漫画の影響で人気を博している一刀石のある神社である。道すがらの熱心な案内看板が素晴らしい。街道筋から歩くこと二十分ほどで鳥居が見えてくる。

参道を進むとあちこちに大きな岩があらわれ、神社に到着するとさらに大きな岩が鎮座している。社殿は小さな拝殿があるのみで巨石そのものを祀る神社だ。いわゆる磐座信仰。原始的な形態の神社は厳かさの極みである。それでいて雰囲気に圧迫感はなく清清しい。ここを神社として祀った人々にひどく共感した。

さて、一刀石は神社のさらに少し奥にある。柳生新陰流の始祖・柳生宗厳（石舟斎）が天狗を相手に修行をしていて、天狗

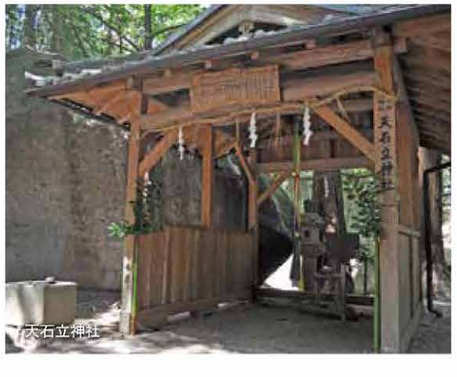
※「波」→「73」→「7×3」→「21」


かえりばさ峠

疱瘡地蔵

六地蔵

一刀石


天石立神社

Soul of Yamato

やまとのこころ

―其ノ七十七―

大和古物と水木コレクション

宇賀志屋文庫主人
奈良県立大学客員教授
岡本彰夫

水木十五堂翁（高田十郎「奈良百題」より）

北畠治房男爵手紙（水木十五堂宛）

奥田木佐手紙（水木十五堂旧蔵品）

岡本彰夫「大和古物と水木コレクション」
久留島浩、高木博志、高橋一樹編『文人世界の光芒と古都奈良　大和の生き字引・水木要太郎』思文閣出版　P455－480
2009年

はじめに

そもそも「大和古物」また「奈良古物」という名称は、骨董業界において大和に伝来した秀逸な古器古物に対して名付けられたもので、他に京古物や江戸古物などという地名を冠した古物の名称は存在せず、ひとり大和古物という名前のみが存在している。

衆知のごとく、明治維新の神仏分離令をピークとして、大和の古社寺を中心に、その関係の家々や、武家にいたるまでが永年にわたって収集、保管していた実に多くの文物を放出した。殊に大和に伝来する多くの品々は人々を魅了した。その範疇はいたって広く、美術工芸品はもとより、古典籍や考古遺物にまで及ぶ。しかも悠く弥生時代・古墳時代から飛鳥・天平の昔はいうに及ばず、平安・鎌倉と続きはては近世・近代と時代を縦覧する。まさに、明治・大正のやまとはこれらの品々が氾濫した宝の山であったことだろう。

この大和に赴任した硯学十五堂・水木要太郎にとっては、その歴史研究家にして好事家、収集家としての辣腕をふるうに、またとない最高の立地条件が完備したといわざるをえない。

本稿では特に十五堂が収集した大和古物とは、いかなるものであったかを考察してみることとしたい。

一　十五堂の収集時期と大和

水木要太郎が大和へ赴任したのは、明治二三年（一八九〇）三月二

native place of music

日本という国に生まれながら、
その音楽について、私達はどれほど
知っているのだろう。音楽を通して、日本人が
大切にしてきたものを探る。

音楽のふるさとを訪ねて

―奈良から日本の旅に出る―

第三十回　東大寺修二会「お水取り」呪師（しゅし）

文　堀内みさ
写真　堀内昭彦
協力：東大寺

呪師は法会中の堂場を結界し、魔障を退け、護法善神の加護を祈念して行法の円満成就を助ける役。本行が始まる直前の2月末日の夕刻に行われる『大中臣の祓い』では、呪師が練行衆一同の祓いを行う。

大仏開眼と同じ天平勝宝四年（七五二）に始まり、今年、一二七〇回を数えた東大寺のお水取り。これまで一度も途絶えることなく続けられてきたこの不退の行法は、コロナ禍の二〇二一年も、中止されることなく行われた。もっとも、「通常通り」行法を行うため、さまざまな感染防止対策がとられたことは周知のとおり。例年多くの人でにぎわうお松明の拝観も、二月堂周辺では人数や日にちが制限され、堂内での聴聞は一切不可となった。例年とは大きく趣の異なった今年のお水取りを、参籠二十八回目となった上司永照さんは、どのように感じていたのだろう。「いつもより堂内の音がよく響き、余計な力みなく声明が唱えられ、じっくり行そのものと向き合えたように思います。一方で、例年どおりの緊張感やはりあいを保つという面では、厳しさも感じました」。

聴聞に足しげく通う人々の多くは、お水取りという行法に信仰を寄せる人たちだ。特に水取りが行われる十二日ともなると、さまざまな講社の人々も集結し、二月堂周辺はより一層活気づく。我が身を振り返っても、当初は音楽的な興味のみで声明に耳を傾け、格子越しに練行衆の所作を垣間見るなどしているうちに、いつしか行そのものを拝むような気持ちで局に座るようになっていた。そんな二月堂に集うさまざまな人たちの発する空気が、行法全体に微妙に影響しているというのである。「こちらも人間ですから、多くの人の感情的な働きかけによって、動かされるところがあります。今回聴聞者がいないことで、本来の姿に戻るのではという声もありましたが、私は聴聞者あっての行法だと改めて思いました」。お水取りの長い歴史を紐解けば、二月堂に局という聴聞するための場所がつくられたのは、平安時代以降のこと。つまり、聴聞者がいる期間の方が長く、その中で行法は練られ、聴聞者と一体となって祈りの空間を築いてきたとも言えるのだ。「声明はたしかに神仏に伝えるものですが、やはり人間にも伝えるようにできていると私は思います」。

そんな今回のお水取りで、上司さんは、自身六回目となる呪師と呼ばれる役を勤めた。印を結び、呪を唱え、堂内に悪鬼邪魔が侵入しないよう結界を張るというこの重要な役どころである呪師は、声明もソロで唱えることが多く、練行衆の中でも目立つ存在だ。特に初夜と後夜の最後に行われる呪師作法では、たった一人で、現実世界から浮遊したような空気感を、堂内に創り上げなければならない。「働きかける相手が、諸神や五大明王、四天王、龍王などで人間ではないという、理屈では語れない役です。声明も、神名帳と同じように、人間の力だけでは呼べないから、旋律の力を借りているように思います。おそらく本来は、呪師をする人間の身体が、『何か』―それがどういう存在かはわかりませんが―に来ていただく道具となり、それと一体となって結界を張るものなのでしょう。ある意味それができる人間が、昔は呪師という役に選ばれたのかなとも思います」。一方、現在自身が呪師を勤めるにあたっては、「『ここに結界を張